

景題「興元晩鐘」とその漢詩文にみる聴覚的な要素の検証

毛利元次選「松屋十八景」に詠まれた風景を都市空間に展開する試み #5

正会員 ○目山直樹 1*
準会員 山本有紗 2**
正会員 谷本圭司 3***

漢詩文 松屋十八景 興元寺
都市環境 聴覚

1. はじめに

(1) 音に聴こえれば「景」

既往研究^{1), 2), 3)}において、「松屋十八景」^{註1)}のうち、「興元晩鐘」の節では、松屋（現在の徳山公園と推定）から興元寺は直接目視できないことがわかっている。一方、詩文の分野では、景色を詠んだ詩は視覚的に見えずとも、音に聴こえれば「景」として成り立つのは常識である。

以上より、「興元晩鐘」のくぐりには、目に見えねども、音に聴こえれば「景」として成り立つことを再確認する。

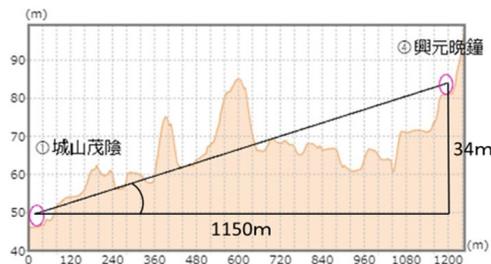


図-1 松屋と興元寺の高低差の関係

【参考】

宇都宮暹庵^{註2)}作 「松屋十八景詩」^{註3)}より

- ・詩（七言絶句）：山間古寺架華鯨、
下界風傳晩晩聲。
一杵存多少功德、
聞来何者耳根清。

・訳文（谷本圭司：「松屋十八景詩 訳注」⁴⁾より）：

興元寺の暮れの鐘
山あいの古刹は鐘を架けており、
下界には風に乗って日暮れを知らせる音が伝わる。
鐘の一撞きに仏の恵みがこもっている（という）が、
鐘の音が聞こえるとどれほどの者の耳を清めるで
あろうか。

(2) 現代では興元寺の「鐘の音」は松屋から聞こえるのか？

萬徳山興元寺（住職、金子清學）の協力のもと、興元寺の鐘を突いていただき、音響的な調査を実施する。なお、松屋（徳山公園）において、「鐘の音」が聴こえるか、聴き分けることを行った。

(3) 作者・宇都宮暹庵は松屋から興元寺の鐘の音を聴いたのか？

関連研究⁵⁾の中で、宇都宮暹庵が2度にわたり徳山に滞在したことがわかっている。宇都宮暹庵は、松屋十八景詩を詩作するにあたり、興元寺の「鐘の音」を聴いたのであろうか？

松屋から興元寺の「鐘の音」が聴こえることを確認するとともに、文献資料等により、宇都宮暹庵がどの季節のいつの時間帯の「鐘の音」を聴いたのかを論考したい。

2. 研究の目的と方法

2.1 研究の目的

本研究の目的は、以下の2点から聴覚的要素を検証することにある。ひとつは、この詩文が詠まれた当時、松屋（お城）から興元寺の「鐘の音」が聴こえたことを証明すること。もう一つは、作者・宇都宮暹庵が詩文をつくった際、「鐘の音」を聴いたことを文献資料からすいていすることである。

2.2 研究の方法

研究の方法は、つぎの3段階である。

第1に、興元寺の「鐘の音」について、音圧レベルの測定をすること、すなわち、発生源の音の大きさを確認する。

第2に、松屋（現在の徳山公園と推定）で、興元寺の「鐘の音」が聴こえるか否かを確認する。

松屋で、興元寺の「鐘の音」が聴きとれることを確認したうえで、第3として、文献資料等から、宇都宮暹庵

(松屋十八景詩の作者)が、詩作当時、「鐘の音」を聴いたであろうことを推定する。

3. 基礎的諸元の確認

3.1 興元寺の「鐘」について

研究対象である「興元寺」は曹洞宗永平寺派の寺院で、萬徳山興元寺という。天正2年(1574年)に、当時、野上庄(野上は徳山の古地名)を領有した杉元相(すぎ・もとすけ)が杉氏の菩提寺として創建したものである。現在の住職、金子清學師に、令和4年12月26日にヒアリングしたものと、興元寺のパンフレット等から、鐘の来歴等を整理する。

宇都宮遯庵が徳山に滞在したおり、耳にした興元寺の「鐘」は、太平洋戦争時に金属の供出で失なつたため、現在の鐘とは異なる。

現在の鐘は、昭和27年(1952年)に、あらたに铸造したものであり、江戸時代の「鐘の音」とは異なるものである。



写真-1 鐘の铸造記念(興元寺提供)

3.2 発生源としての騒音音圧レベルの測定(令和4年12月26日)

(1) 音圧測定の目的

現代において、興元寺の「鐘の音」がどのように聴こえるかを把握するため、音圧計による観測を行う。

(2) 鐘の撞き手の特性

鐘を撞くのは副住職で、鐘撞になれており、一定の強さでつくことができる。

(3) 音圧計の諸元

使用した機材とその諸元は以下のものである。

- ・モノタロウ デジタル騒音計
- ・周波数特性 A特性/C特性

- ・周波数範囲 31.5Hz~8kHz
- ・測定範囲 Autoで30dB~130dB
- ・分解能 0.1dB
- ・確度 ±1.4dB
- ・サンプリング 2回/秒



図-2 デジタル騒音計(音圧計)の外観

(4) 実験実施日時

実施日時は、令和4年12月26日で、14時から15時までの約1時間に実施した。

(5) 音圧測定の実施内容

音圧計により鐘を撞いた時の音圧を測定する。人間の耳に聞こえるA特性を観測する。騒音音圧レベルの最大値を2回以上観測する。

1) 興元寺での観測

鐘の下で観測したのち、1m、2m、3m、4m、5mと離れて観測し、音圧を記録する(図-4)。

2) 境内の駐車場で観測

境内の駐車場、鐘楼の下、5m程度の場所で、観測する。

3) 松屋(徳山公園)での聴きとり

遠くにかすかに聴こえる音が想定されるため、音圧計は用いず、調査員の聴覚で聴き分けられるかを確認する。

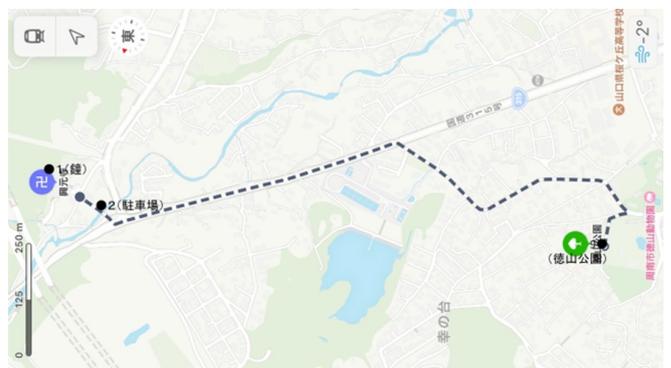


図-3 興元寺と松屋との位置関係と観測地点

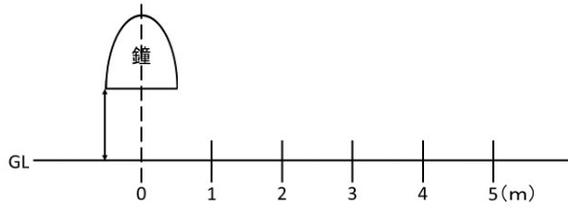


図-4 興元寺鐘楼からの測定位置

(6) 興元寺での実施結果

興元寺鐘楼下での観測結果を整理すると、以下のようであった。

- ①鐘楼直下は、100dBを超える音圧を観測した。
- ②1m離れた場所では、遮蔽物があるため、騒音音圧レベルが低下した。
- ③2m, 3m, 4m, 5mと離れても、音圧110dB前後を観測しており、音の伝わり方はほぼ一定していた。低減などの傾向はみられなかった。
- ④境内の駐車場では、90dB前後の音圧を観測した。

表-1 音圧計による観測結果

| 測定点 | A調 (FAST) (dB) | | | | |
|-------|----------------|-------|-------|-------|-------|
| | 1回目 | 2回目 | 3回目 | 4回目 | 平均値 |
| 鐘の真下 | 111.0 | 88.8 | 109.4 | 108.6 | 104.5 |
| 鐘から1m | 102.3 | 96.3 | 109.4 | — | 102.7 |
| 鐘から2m | 102.5 | 116.8 | — | — | 109.7 |
| 鐘から3m | 111.4 | 111.9 | — | — | 111.7 |
| 鐘から4m | 109.0 | 109.3 | — | — | 109.2 |
| 鐘から5m | 111.9 | 109.1 | — | — | 110.5 |
| 駐車場 | 102.9 | 85.3 | 88.4 | 88.2 | 91.2 |
| 15分後 | | | | | |
| 徳山公園 | 「耳にきこえる」→× | | | | |

(7) 松屋（徳山公園）で聴こえたか否か

この日、徳山公園では、「鐘の音」を聴きとることはできなかった。観測者は目山、山本、谷本（著者3名）であった。風向きは西から東に吹いており、興元寺に対しては逆風であった。徳山公園での騒音音圧レベルは40dB 台前半であった。

4. 松屋（推定地）での「鐘の音」の聞き取り

4.1 令和4年12月26日観測時

12月26日の観測では、徳山公園では、「鐘の音」を聴きとることはできなかった。観測者は目山、山本、谷本（著者3名）であった。風向きは西から東に吹いており、

興元寺に対しては逆風であった。徳山公園での騒音音圧レベルは40.6dB～43.1dBであった。

4.2 令和5年1月1日 除夜の鐘観測時

令和5年1月1日0時20分から1時20分の間、興元寺境内と徳山公園で観測調査をした。

興元寺境内の駐車場で、除夜の鐘を観測した。参拝客が撞くと音圧80dB前後であったが、副住職が撞くと82dBから85dB程度となり、12月26日の観測値と差はみられなかった。

徳山公園では、2名の観測者が、興元寺の鐘の音を聴き分けることができた。

風は、ほぼ無風の状態で、プラスにもマイナスにも作用していない。徳山公園の騒音音圧レベルは40dB程度で、12月26日とあまり差はなかった。

5. 宇都宮遯庵が「鐘の音」を聴いたかについての論考

5.1 徳山滞在時に「鐘の音」を聞いたはず

宇都宮遯庵の徳山滞在は、1703年と1705年の2回である。1703年は旧暦の9月28日から10月8日までの滞在で、今日の暦に換算すると、11月9日から11月18日に相当する。1705年は9月20日から10月10日までで、現在の暦に換算すると11月1日から11月20日に相当する。

宇都宮遯庵が「松屋十八景詩」を詠んだのが1703年のことなので、11月中旬の季節に滞在し、その風景を詠んだものと考えられる。

「興元晩鐘」の景題は、まさしく時宜を得たもので、詩文の中身も季節に対応するものと考えてよい。

表-2 宇都宮遯庵の徳山滞在時期^{註4)}

| 元号 | 西暦 | 期間 | | 太陽暦換算 | |
|------|------|-------|--------|-------|--------|
| | | 始 | 終 | 始 | 終 |
| 元禄16 | 1703 | 9月28日 | 10月8日 | 11月7日 | 11月16日 |
| 宝永2 | 1705 | 9月20日 | 10月10日 | 11月6日 | 11月25日 |

5.6 いつ聴いたか？それは暮れ六つの鐘

谷本の訳⁴⁾では、「風に乗って日暮れを知らせる音が伝わる」とあり、明らかに「暮れ六つ」の鐘を指している。現在、近隣への騒音となることから、除夜の鐘以外には、鐘を撞くことはなく、今回の調査・研究のために、特別に鐘を撞いていただいた。

宇都宮遯庵の徳山滞在で耳にした「興元寺の鐘の音」は、暮れ六つの鐘であったと推測できる。

6. まとめ

(1) 興元寺の「鐘の音」の音圧測定

発生源である「鐘の音」の音圧測定（令和4年12月26日）の結果、鐘楼から5m以内の地点でA特性（人間の耳で感じるもの）110dB程度の音圧レベルにあることがわかった。

鐘楼から5m直下の境内駐車場で測定したところ、85dB～102dBの幅があるものの80dB以上の騒音音圧レベルにあった。

令和5年1月1日0時台の「除夜の鐘」を境内駐車場で観測したところ、82dBから85dBの騒音音圧レベルにあった。

(2) 松屋から興元寺の「鐘の音」が聴こえるか否か

松屋（現在の徳山公園と推定する）から、興元寺の「鐘の音」が聴こえるか否かについて、複数の観測者^{註6)}による聴き分けを行った。

12月26日の昼間の観測では、「鐘の音」は聴き分けられなかった。

一方、1月1日の除夜の鐘の「鐘の音」は聴き分けることができた。風はほぼ無風であった。

以上より、松屋から興元寺の「鐘の音」は聴こえたであろうと推定できる。

(3) 宇都宮遯庵は「鐘の音」を聴いて詩作したのか

宇都宮遯庵の徳山滞在は1703年の11月中旬である。遯庵は松屋から興元寺の「鐘の音」を聴いた体験をもとに景題「興元晩鐘」を詩作したのであろう。

謝辞:

本研究は、令和4年度徳山高専テクノ・アカデミア事業の助成を受けた産官学連携研究会「周南地域の偉人顕彰に関わる研究会」の成果を含むものである。とくに、周南市美術博物館学芸課長、松本久美子氏には、資料提供や解釈等の助言を得た。記して謝意を表す次第である。

興元寺住職、金子清學師ならびに副住職、金子昌寛師には、「鐘の音」の音圧測定ならびに来歴等についてのヒアリングにご協力いただいた。記して謝意を表す。

註記

註1) 松屋十八景は、徳山毛利家第3代、毛利元次

(1668-1719)が、徳山屋形に設けた亭「松屋」からの眺めを十八の景題として選び、のちに、家臣桂方直が松屋十八景記を、宇都宮遯庵が松屋十八景詩を詠んだ。

註2) 宇都宮遯庵(1633-1707)は、江戸時代前期の儒学者で、岩国領主吉川家に仕えた。徳山城下には、領主毛利元次に招かれ、1703年の秋と1905年の秋に訪れ、滞在している。

註3) 松屋十八景詩は、1703年に宇都宮遯庵が、毛利元次に招かれ、徳山に滞在した折に作った漢詩文であり、前半の景題を春夏秋冬に編みなおしたものである。

註4) 宇都宮遯庵の徳山滞在時期は、文献6)より作成し、陰暦から太陽暦換算を行った。

註5) 「周南地域の偉人顕彰に関わる研究会」は、徳山高専の教員と、周南市美術博物館の職員、テクノ・アカデミア会員企業により、令和4年度に3回の研究会を行ってきた。

註6) 観測者は、以下のとおりである。

12月26日 目山直樹、谷本圭司、山本有紗

1月1日 目山直樹、目山めぐみ

註7) 取材協力。曹洞宗永平寺派、萬徳山興元寺。所在地:周南市徳山 5122 番地 (一の井手), 住職:金子清學。寺院の来歴等は金子師へのヒアリングとパンフレット類により確かめた。

参考文献

- 1) 村上日向子(2022)「漢詩文に詠まれた景色を都市空間に展開する手法の提案、一毛利元次選「松屋十八景」による一」、2021(令和3)年度徳山工業高等専門学校土木建築工学科卒業研究論文集、2022年3月
- 2) 谷本圭司、目山直樹、村上日向子(2022)漢詩文「松屋十八景記」にみる共通の視点場からの「景観」の読み解き 毛利元次選「松屋十八景」に詠まれた風景を都市空間に展開する試み#1、日本建築学会大会講演梗概集、環境工学部門 OS、講演番号 40001、2022年9月
- 3) 目山直樹、谷本圭司、村上日向子(2022)漢詩文「松屋十八景記」に詠まれた景観の都市空間分析と考察 毛利元次選「松屋十八景」に詠まれた風景を都市空間に展開する試み#2 日本建築学会大会講演梗概集、環境工学部門 OS、講演番号 40002、2022年9月
- 4) 谷本圭司(投稿中)「松屋十八景詩 訳注、学術誌「周南学」、周南公立大学、2023年度刊行予定
- 5) 目山直樹、谷本圭司、松本久美子(投稿中)宇都宮遯庵作 漢詩文「松屋十八景詩」成立の背景、毛利元次選「松屋十八景」に詠まれた風景を都市空間に展開する試み#3、日本建築学会中国支部研究発表会、2023年3月(予定)
- 6) 桂芳樹(1978)宇都宮遯庵、岩国徴古館刊、p.167～176

1* 徳山高専土木建築工学科 准教授

2** 徳山高専一般科目 准教授(専門漢詩文、国語教育)

3*** 徳山高専土木建築工学科 5年生